

キレやすさと身体状態の関係性

猪野 美晴

本研究の目的は、キレやすさと発汗量や心拍数のような身体状態の関係性についての解明である。本研究ではキレるを、「自分の理性で怒りを抑えられなくなる状態で、自分ではコントロールができなくなる」と定義する。このキレるという行為は時に人を傷つけることもある。神奈川県内の東名高速道路において、あおり運転等の悪質・危険な行為を原因とする悲惨な死亡事故が発生したことは記憶に新しい。このことから、近年キレることに対する関心が高まっている。しかし、キレることについて被験者実験を行っている研究は不足している。本研究は被験者実験を行い、身体状態の変化とキレやすさの関係を明らかにすることで、キレることの対策に貢献できる。

本研究では、質問紙調査、被験者実験で発汗量と心拍数、脳波の測定を行う。今回使用する日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙は攻撃性の高い人間ほど点数が高くなるように作成されている。また、本研究で計測する発汗量は精神性発汗と呼ばれており、精神的ストレスが生じている現象を示すといわれている。そして、心拍数はストレスや興奮によって交感神経が優位になると上昇し、ポジティブ感情のときは減少することが解明されている。これらのことから、本研究では、「キレたことのある人のほうが、攻撃性質問紙の点数が高くなる」、「感情の起伏が起きたとき、キレた経験の有無で身体状態の変化に差がみられる」の2つの仮説を立てた。

これらの仮説を検証するために、キレたことのある20名（以下A群）、キレたことのない20名（以下B群）の計40名に対して実験を行った。実験では、1) 平常時、2) 嬉しいときの追体験、3) キレたとき、または怒ったとき・イライラしたときの追体験の際の発汗量と心拍数、脳波を測定した。この実験から、A群はB群と比較して、攻撃性、短気の点数が高いこと、キレたときと平常時の発汗量の差が大きいことが明らかになった。また、男性と女性では、質問紙調査、発汗量、心拍数の全てで有意差がみられなかったことから、キレやすさと性差は関連がないことがわかった。また、A群の女性はB群の女性と比較して、攻撃性、短気、身体的攻撃の点数が高いこと、キレたときと平常時の発汗量の差、嬉しいときと平常時の心拍数の差、キレたときと平常時の心拍数の差が大きいことも明らかになった。このことから、キレやすい人は、攻撃的で短気、身体的攻撃性が高く、感情の起伏による身体状態の変動が大きいことが明らかとなった。このことから、あらかじめ自分の発汗量や心拍数の変化について知っておくことはキレることの防止に繋がると考える。

本研究では、大学生を対象に実験を行った。しかし、年代によって発汗量や心拍数の変動は異なる可能性がある。ほかの年代にも調査対象を広げることで、キレやすさと身体状態の関係性がより明らかになると考える。

(指導教員 真栄城 哲也)